丸内台

第３１号
発行
小松同窓会本部
〒923－8646
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
同窓会報編集委員会
TEL･FAX (0761)21-6330
印刷　マルト印刷工業株式会社

新春随想　市町村合併

井川　邦彦

今年の年賀状の差出人の住所欄を見て、そこに記された地名に目を留められた方も多いのではないでしょうか。石川県にお住まいの同窓生の皆様には、何をいまさらの感もおありかと思いますが、編集委員の方にお聞きした処、県外にお住まいの読者も多数いらっしゃるということでしたので、少し石川県の合併事情をお話させていただきます。

平成の大合併といわれた今回、全国の自治体数は平成十一年三月に三二三二あった市町村が平成十八年三月には一八二一にまで減少するということです。石川県も四十一あった市町村数が二十にまで減少しています。

時代の趨勢の中での変遷とは言え、寂しさを感じているのは私だけではないと思います。というのも、私の住んでいる寺井町は、昨年の二月に、根上町・辰口町との合併で能美市となりましたが、自分の住所に慣れ親しんだ寺井町という文字がないのは、やはり妙な気持ちになるもので、この思いと言うのは、程度の差こそあれ、皆にあるものだと思うからです。

他にも同窓生になじみのあるところでは、松任市と白山麓の一町五村、美川町の七つの自治体が白山市となりましたし、加賀市と山中町も、昨年十月に加賀市として新たなスタートを切ったところです。

山中の地名は住所表記では「加賀市山中温泉」として残ったようではありますが、歴史ある「江沼」という地名は江沼郡山中町とともに消えてしまったわけです。

地名は、昔からのその土地の地形であったり、自然であったり、あるいはまた有力者の名前であったりと、いろいろなことを私たちに教えてくれたものでしたが、その地名が消えてしまうということは、故郷の歴史を学ぶ学習の機会でありますとか、あるいはもっと大きくいってしまえば、故郷の文化であったりといったものを忘れてしまうことにつながりかねません。

かといって、私は市町村の合併に反対しているわけではないのです。

ちょうど私は今、地元寺井高校の校長をしておりますが、合併でなくなってしまった地名でも、学校の名前などとして残っているものは数多くあります。そういう意味で、学校、そしてその学校の伝統というものは、共に大切に受け継いでいきたいものだという思いを強くしております。

もちろん、母校小松高校という名前も、その「質実剛健」という伝統と共にしっかりと受け継いでいかねばならないと思いますし、それらのことをしっかりと見守っていくのが地元に残った私たちの使命ではないかとも考えております。

故郷を離れてお住まいの同窓生の皆様には、年賀状などをもう一度お手に取っていただきながら、新たになった住所を眺めながら、旧の自治体名とそこに住む友人たちの顔を思い出してみていただければと思います。

（高校18回）

御礼

新年明けましておめでとうございます。

皆様お揃いで清々しい初春をお迎えのことと、お喜び申し上げます。

旧年中は、新校舎落成に伴う募金をお願いいたしましたところ、皆様方の暖かいご芳志のお蔭で目標額を凌ぐ寄付を賜りまして本当にありがとうございました。心から感謝をいたしております。

早速、集会室のメモ台付き椅子330個を購入、賞典棚も設置しました、ウエイトトレーニング場の建設も始まりました。図書館の蔵書の充実や美術品展示棚の設置等の事業もこれから進めて行きたいと思っております。

同窓会としての落成記念式典・祝宴は７月頃に予定しております。詳細が決定いたしましたらお知らせ致します。どうぞその折には皆様方こぞってご出席下さいますようお待ち申し上げます。

取り急ぎ、ご報告をかねて厚く御礼申し上げます。

平成18年１月吉日

小松同窓会会長　吉田　歳嗣
小松高等学校校長　栖川　成人
募金委員会委員長　長沼　弘喜

校舎改築工事終わる

教頭　伊藤　充

平成十二年から始まった本校校舎改築工事も十七年十一月でようやく終了しました。

今回は会員の皆様に第三期工事で新しくできあがった生活学習センターの内容を中心に紹介したいと思います。

会員の皆様は新しい正門（三月完成予定）をくぐって正面から校舎に入っていただきます。そこには二人の人間国宝、徳田八十吉氏（高校4回）と吉田美統氏（高校3回）の作品が同窓会からの寄付による免震装置付きの展示ケースに飾られています。

その美しさに圧倒されながら先に進むと第二期工事で完成した管理教室棟と第一期工事で完成した特別教室棟をつなぐ広い廊下が目につきます。

1階 中央廊下

この南北を貫く廊下は正面玄関から特別教室棟ピロティ入口まで幅四・五メートルで実に長さは百メートルを超えています。まっすぐで見通しがよく、「広いなあ」という声がたくさん聞かれ、気持ちのいい空間になっています。

少し生活学習センター棟に向かって進むと右手窓越しに「哲学の広場」が見えてきます。

「哲学の広場」は管理教室棟と生活学習センター棟で囲まれた場所を円と長方形で幾何学的に構成した現代的なセンスの庭です。中央の円形部分に水をたたえ、水面鏡とし、その周りを黒石で敷き詰めた長方形、更にその周りを白石で敷き詰めた長方形が囲む形で、その水面鏡に己の姿を投影しながら思索にふける、そんな静かな広場をイメージして「哲学の広場」と名付けられています。

哲学の広場（階上より）

一方左手に目を移すと、そこには小高い丘陵に芝生を張り、ベンチなどもおいた広場が広がります。これは三月までに完成することになっており、今は工事中です。

また、階段横の壁面には賞典棚が設置されました。これも今回の寄付によるものです。

賞典棚

広場を見ながら建物内に入っていくとやや広いスペースの右側が生徒玄関になります。ここには生徒一人ひとりに七十センチ高の口ッカーが配備され、室内履き、体育館履き、体育着や傘までも入れて生徒は活用しています。

生徒は東門から入るか、あるいは正門からいったん東側に回って学校に入ることになります。

では、二階に行きましょう。中央階段を上がって左手は三棟をつなぐ南北の通路があります。中央が弓形に湾曲していて外の風景がとても見やすくなっています。その前には三角柱の移動可能な家具が置いてあり、生徒たちは思い思いの形に変えながら、団笑の場として利用しています。

この廊下の東側壁面には創立百周年の時に寄贈していただいた絵画のうち、日本画を六点飾ってあります。生徒たちは教室移動の際に、あるいは昼休み等に眺めて、知らず知らずのうちに鑑賞眼を培っているようです。

2階中央廊下 美術作品
図書室前 書道作品

階段の真向かいには小講義室があります。三室に仕切ることにより、十五人程度の少人数授業を三展開行うことができます。間仕切りは防音効果が高く、有効に活用できるようになっています。

隣は学習室。ここは図書室の書物や資料を持ち込んでクラス単位で調べ学習に使う部屋です。ここには一人用のやや大きめの机が二十七人分と六人がけの机が三つ入っており、最大四十五人が学習できる形になっています。雑音をシャットアウトできる形になっているので、放課後の自習室としても解放しています。

廊下を挟んで向かい側は多目的講義室で四室に仕切ることで二十五人程度の少人数授業を行うことができます。

突き当たりが図書室です。入口前の廊下は右手は職員室、左手は第二体育館につながっています。この廊下の西側壁面に書の作品が

九点飾られています。それぞれは書体や出展も違うので書道の奥深さが一作品ごとに伝わってくる感じがします。

図書室の閲覧室は創立六十周年記念事業で作られ、正面左手にあった（十二月中に取り壊し）図書館と同じスペースがあります。閲覧図書は二万冊を超え、現在のところ空いた書架もいくらかあります。今後充実を図っていくところです。

図書閲覧室

東側は全面ガラス窓になっており、大変明るく、吹き抜けの空間とも相まって、広さを感じさせる落ち着いたスペースになっています。四十八人分の机いすがあり、学習室とあわせると以前と同程度の人数が収容できます。更に、窓下を有効利用して、カウンター式の閲覧スペースも設置してありますので、生徒がそれぞれの目的に応じて利用できるよう配慮されております。

三階に行きましょう。廊下をいったん戻って、中央階段を上がります。左手は二階と同じ三棟をつなぐ南北の廊下になっています。この東側壁面には洋画が六点展示してあります。主に、二年生、一年生が行き帰りに眺めています。

3階中央廊下　美術作品

階段の向かい側は情報処理室です。一クラス分のコンピューターがあり、情報の授業の演習や課題研究のまとめ、その他インターネットでの検索、情報収集などに使われます。

そのまま廊下を進むと、情報研究室、生徒会室、生徒会指導室と部屋が続きます。

中でも、生徒会室は生徒会執行部が執行委員会や生徒会行事、事業などを企画・立案のため使う部屋で、かなり広いスペースがとられています。

これらの部屋の向かい側にちょっとした喫茶店と見まごうスペースが広がっています。「コモンスペース」と称し、十個の円テーブルに四十脚のいすが配置され、昼休みにお弁当を広げたり、自販機の飲み物を飲みながら、楽しく語り合う場として使われています。この一角に購買室はありますが日替わりランチやパン、文房具などを販売するだけで食堂とはなっていません。

また、ここには陶芸作品を展示する棚が据えられており、十二個の皿や壺などの作品が生徒たちの目を楽しませています。この展示棚は可動式となっており、展覧会などへの活用も可能となっています。

コモンスペースと陶芸展示棚

南側にはベランダがあり、外気に触れながら、上から眺める「哲学の広場」にはまたひと味違った感慨がわき起こることでしょう。

図書室の真上に当たる場所に視聴覚室兼集会室があります。電動スクリーンや視聴覚機材があり、ビデオやDVDが鑑賞できるとともに、簡易ステージや演台も用意されており、一学年全員が入っての集会や講演会も可能となっております。この部屋に先日、同窓会よりメモ台付き椅子を三百三十脚常備していただきました。大切に、しっかり活用していきたいと思っております。また、この部屋は防音効果が高いので、日常的には吹奏楽部の活動場所として使っています。

視聴覚室兼集会室

以上生活学習センターの各部屋、各コーナーを紹介して参りました。生徒にとってすばらしい教育環境の場が完成したと思います。とくに、本物の芸術作品に日常的に触れるいくつかのコーナーは知らず知らずに生徒の心を豊かなものにしてくれるものと思います。新しい校舎を機に学力をしっかり伸ばすとともに、豊かな心を育み、社会のリーダーたるに相応しい人間力の育成に努めて参りたいと思います。

生誕100年記念特別展「宮本三郎の戦争と平和」の開催で改めて「友」を想う

橋本　正博

戦後六十年を迎えた昨年十月、小松市立宮本三郎美術館ほか三施設において「戦争と平和」をテーマとした画伯の生誕100年展を開催いたしました。この展覧会の紹介も含めて編集委員の山口氏より本誌への原稿依頼を受け、若輩者ながら一文を掲載する事となりました。そして執筆していくうちに高校生の頃の記憶が蘇ってきました。

当時の自分は目的意識を持たない学生生活を送っていたように思います。ただ成績はともかく日本史と世界史にとても興味がありました。つまり（教科書に掲載された）歴史的事実の背景にある様々なエピソードや真実に対して関心を持ち、また疑問も持ったのです。

そんな中、高校2年の時に日本が中国東北部に建国した「満洲国」を取り上げた映画が封切られ、親しかった友人の誘いで3度映画館へ通いました。この映画がきっかけで中途半端だった高校生活は一変し、大学の希望学部でも「文学部史学科」を選択し、実際に大学では近代東洋史を専攻し、「満洲国」成立過程を中心とした十五年戦争を研究対象としたのです。友人が誘ってくれた映画の鑑賞によって、単純にも目的が明確になったといえます。

大学を卒業後、出版部を持つ地元の印刷会社に就職しましたが、他社との差別化が見い出せず、また営業成績のみを最優先する社の体質を嫌い、2年で退社。文化的な仕事を求めて大学時代の多少の経験を活かして遺跡の調査・保存を主とする小松市埋蔵文化財調査室のアルバイトに従事。1年後、本採用となりました。そして7年間埋文行政に携わった後、専門外である宮本三郎美術館へ学芸員職として異動辞令が出たのです。

裸婦を中心とした華やかではあるが難解な絵を描く画家、というイメージだった宮本三郎。

異動後の最初の仕事は当然ながら資料整理を兼ねた詳細年譜の作成となりました。そして3年目となった今年度、多くの方のご協力を得ながら先輩学芸員とともに生誕100年記念特別展を開催する事となったのです。そして本展の中で注目作品と位置付けたのが昭和十七年に宮本が従軍画家時代に描いた「山下、パーシバル両司令官会見図」と戦後進駐軍の依頼によって制作された金沢湯涌温泉旧白雲楼ホテル食堂壁画「日本の四季」（全6面）であります。右も左も分からぬままに異動した美術の世界。しかしながら宮本の画家としての歩みをたどってゆく間に、いつしか高校生の頃に興味を持ち、大学で研究に没頭した「戦争」というテーマに自分が再び対峙していることに気付いたのです。

手前は小松高校蔵「神風特攻隊 葉桜隊員の像」
奥は「山下、パーシバル両司令官会見図」

本展覧会では1万3千人余りの方が来場し、宮本画伯の作品にふれていただきました。ご覧いただいた皆様、作品を借用させていただいた方々には言葉では表現できないくらい、感謝の気持ちで一杯です。来館者の中には高校生の時に日本史を教えていただいた恩師も含まれていて、先生には3度も美術館に足を運んでいただきました。

展示された「日本の四季」

最後に今回の展覧会の成功を高校2年の時に映画館へ誘ってくれた友人に報告したいと思います。

（宮本三郎美術館学芸員、高校41回）

卒業写真

冨岡　省三

卒業写真を見ると（昭和23年小松中学46回卒）中学時代の想いが駈け巡る。

写真の記録という事実が如何に大きいかを感じさせる。

「ありのままをうつしとる」との意味から写真と訳されたが、まさに時の記録である。

この卒業写真には女性が一人も写っていない。当時の男女席を同じくせずの事実がありのままに写っている。今は男女共学で微笑ましい学園生活を送っているように思う。年がいもなく羨ましくさえ感ずる。

さて、何が動機であったかは定かではないが、私は写真ブームに乗せられ、深みにはまった一人である。

写真が誕生してから暫くの間は写す技術の習得が重要だった。時代が変わりカメラが自動化した現在は誰でも写す時代になり、カメラのシャッターを押す指は単に一つのメカニズムを動かすにすぎないと酷言する人さえあった。

写真で〝時〟を記録するという大きな意味があると同時に美術展などに写真の分野が設けられるようになったのは、写真に〝美の方向〟があるという認識が生まれてきたからである。

絵を描くことと同じように写真もまた個人的解釈を表すための表現手段である。つまりカメラは筆にすぎない。〝弘法筆を選らばず〟の例え通り立派なカメラは見る人を感動させる作品を生みだすとは限らない。

作品には幼児体験、教育体験、社会体験、環境からの影響が大きいという。

金沢で話題となっている21世紀美術館がオープンした。幸いに住まいが近く、良い作品に触れる環境にあることを幸せに思っている。

ジャンルを問わず優れた作品に接し、美につながる感動を積み重ねることが大切である、と強く認識している。

「作品に人間性が出る」といわれる。大きな人間になりたい、75才は鼻垂れ小僧、今からだと自分に言聞かせている。

（中学46回）

平成17年度 小松同窓会金沢支部 総会のご報告

前坂　雅男

隔年毎に開催される小松同窓会金沢支部の総会は、昨年8月6日の土曜日に金沢都ホテルで開催いたしました。

総勢百八十五名の参加をいただき、ご来賓として同窓会長の吉田歳嗣さん、学校の栖川成人校長先生のご来臨をいただき、小松同窓会のこと、今の小松高校のこと等のお話しをいただき改めて故郷のことを懐かしく思い出させてもらいました。

今回の講演者には本校18回卒業で書家であり篆刻家でもある北室南苑（正枝）さんにお願いいたしました。丁度中国北京での「漢字の成り立ち」の交流展に出席されて帰国されたばかりでしたので今の中国のお話しと、本題の「漢字を楽しむ」をプロジェクターを使ってのお話しは、漢字をアートと捉えたところに、漢字にはあまり縁の無いものも面白かったとの評判でした。

ご来賓の栖川校長さんも18回の卒業でしたので、多数出席の18回生を中心としたテーブルまわりの盛り上がりは大変なものでした。次回の平成19年の再会をお約束し成功裡に終了いたしましたが、会が終わっていろいろと考えさせられたこともありました。

まず今までは皆出席だった中学31回の伊藤清雄大先輩がご病気の理由でご欠席されたことです。おれますが、何時も矍鑠（かくしゃく）とされてごあいさつと乾盃の音頭をとっていただくことが恒例でしたのにとても寂しい思いをいたしました。そして毎回中学、県女の先輩方の出席は五十名前後でしたのに今回は十名という数になってしまいました。ご返事にいただいたはがきには高齢のこと、病状のこと、連れ合いの介護のこと、県外で子供や孫に世話になっていること、等止むを得ぬこととは言え、だんだんと寂しくなっていくのは仕方が無いことかもしれません。2年間での変化に驚かされました。

数えてみれば高校1回生の方は多分「喜寿」をお迎えになっていられることから考えれば逆に元気な先輩もたくさんおいでになると言えるかもしれません。

金沢支部の会員の目安として四十歳になられた学年より総会のご案内をしておりますが、若い方々の出席が甚だ少ないのは会の企画内容なのか、会費の額なのか、日程のことなのか、役員同志で話し合っていますが理由が良く解りません。

若い方々を中心とした小松同窓会になって欲しいのですが何か良いご提案でもあれば教えていただきたいと思っております。

一度他支部の役員と交流をもって意見交換会をやってみては如何でしょうか？

小松同窓会金沢支部の総会の模様のお知らせと、会の今後の在り方等について感想を述べさせていただきました。（高校8回）

天守台のもとに集う

中川　弘

32年に卒業したのでミニ会…実に安易な名称を持つ私どもの同窓会です。卒業以来、大体4年毎に開催されて居りますが出席率は25～40％と言う盛会です。今回の出席率はヤヤ悪くて約70名（16％位か）、幹事さんたちは今回も盛りだくさんの行事を企画して居られました。

私どものように「旅」に出ている連中のために、大河ドラマで盛り上がっている安宅関所にできた新築のミュージアムの紹介と関所せんべいで大いに郷愁をかき立てる演出をしてくれました。

午後の2時から素晴らしく新装成った母校に集結してオトコマエの教頭先生の案内で見学しました。教室や体育館で出会う校内の生徒たちは、目が合うと含羞みながらも気持ちよく挨拶をしてくれました。生憎の雨降りで天守台にまでは行けませんでしたが、思い出が詰まった記念館、2年生の頃のホームルームは正面入って右へ行った突き当りが三井ホームで、その隣が私の橋本ホームで階段教室でした。当番の日は掃除がし難くて苦労しました。

3年生では左側の2階が私の清水ホームでした。ちなみに隣が森ホーム、片桐ホームと日ごろ全く忘れていた先生方の名前までありありと思い出しました。クラブ活動の展示室では、「そうそう、ボートクラブは私らの3年生の時に発足したんだった」とこれも懐かしく、去りがたい思いで時間の経つのも忘れる思いでした。

メーン会場は粟津の「のとや」へ秋葉原の電気屋の社長をしている山岳部出身の「ギッシャン」を同乗して繰り込みました。そう言えば、このギシも高校時代は天守台の下でテントで野宿しながら登校していたこともあったなァと。

私どもの同窓生も、政治家、銀行家、大学教授、高校教師、校長先生、官僚キャリア、医者、上場企業や新聞社の役員や幹部、個人企業の経営者から神主、町内会長さんまで実に多士済々で未だ現役で活躍中の方も居られますが殆どは呑気なリタイヤ組に属して居ります。残念ながら鬼籍に入った方も約1割（44名）に達しました。

高校時代に戻って、思い切り気を許し、小松弁で笑い転げて、マドンナたちにチョッピリ時めき、先に逝った腕白達に涙して、厚歯の下駄を「ガラガラ」言わせた通学の行き帰りを昨日のことのように思い出し、何を食ったか思い出せない一夜でした。

翌日のゴルフ大会には不参加で帰阪しましたが富山の銀行やさんからメールが追いかけてきて初優勝したとか…オイラが抜けると喜ぶ人も居るワイ！と、一人で憎まれ口を叩いたものです。この分では同窓生が残り3人になるまでミニ会は続きそうです。

その時でも私はこんな憎まれ口をきいて居れるのかなァ。（高校9回）

酒井　隆

五年目を迎えたホームスクールカミングディが、九月二五日（日）に記念館階段教室で行われました。

今回は今年還暦を迎える我々高校16回生と、初老を迎える同36回生が対象学年でした。講師にお迎えした先生は理科（化学）の畑野禎先生と社会（政治経済・倫理）の粟谷外志久先生でした。

畑野先生は昭和四十四年度から十四年間小松高校の教壇に立たれ、教務課、進路指導課のお仕事を中心に生徒の指導に当たられ、その迫力のある授業と生徒に真っ向から立ち向かう指導方針には多くの畑野学徒を生み出したものでした。

畑野 禎 先生

当日の講義は「平成の高校化学教育事情を管見する」と題されたものでした。東西冷戦構造の中でアメリカが提唱した科学教育の高度化が日本の高校理科教育に及ぼした影響について述べられ、理科嫌い改善の近道はできるだけ実験観察を取り込むことと、豊富な教育経験をまじえながら話されました。最後にふれられた小松が産んだ実験科学教育の祖である今川覚神（カクシン）、一（ハジメ）の両先生の紹介（蒸発、蒸留、昇華、結晶等の物理化学用語を翻訳考案したのは両先生の業績だそうです）は非常に興味深いものでした。

粟谷先生は昭和五十二年度から十七年間本校に勤務され、畑野先生と共に熱心な指導に当たられました。にこやかな表情を絶やさず生徒と接し、その含蓄のある授業内容に多くの生徒が感銘を受けたものでした。

先生の講義内容は「わが青春懺悔録」と題したものでしたが、懺悔とは先生一流のユーモアで、自身の高校時代から教員となってから、また現在公民館活動などの社会教育にご活躍なされているお話は一つ一つが示唆に富んだ内容でした。

粟谷 外志久 先生

特に興味深かったのは、先生が小松高校に勤務しはじめた昭和五十二・三年頃から、学校新聞（『小松高校新聞』）の紙面上から先生宅訪問記の記事がなくなったというお話でした。これは生徒と教員の関係、就中生徒と学校との関係がこの頃を期に変化しはじめたことを意味しているのではないかというお話でした。

また、先生が教員になりたての頃、先輩教師の授業を一年間通して参観させていただいて教材研究を行ったことなども、できるようでできないことだなと感心しました。

懐かしの授業のあとは伊藤・麻多両教頭先生、田島事務長の案内で完成間近の新校舎を見学しました。教室棟と特別教室棟はすでに完成し以前から使用が始まっています。十月いっぱいで残る生活学習センター棟が完成するとのことで、素晴らしい教育環境にため息がもれる程でした。

その後、青春の思い出が満載の天守台下に移り、懇親会が始まりました。吉田歳嗣同窓会長、栖川成人校長から挨拶をいただき、畑野先生の音頭で乾杯が行われ、参加者一同時間のたつのを忘れて在りし日の高校生活の思い出を語り合いました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、開会時には現役ブラスバンド部の生徒さんたちによる校歌演奏まで用意され、楽しいひとときを過ごさせていただきました。また、会の運営・進行には高校32回の後藤修平氏、平野勝氏にお世話をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

（高校16回）

天守台下での懇親会

文武両道　後輩たちの活躍

陸上競技			
世界ユース陸上選手権(モロッコ)	男子10000mW	3位	鈴木 雄介
国民体育大会県予選	男子800m	4位	平野 友樹
	女子3000mW	2位	池田 愛深
	女子円盤投	1位	佐々木 美里
きらめき総体(千葉)	男子5000mW	優勝	鈴木 雄介
県高校新人大会	男子100m	優勝	杉元 裕貴
	男子200m	4位	杉元 裕貴
	男子800m	7位	平野 友樹
	男子5000mW	7位	城戸内 駿
	男子4×100mR	3位	
	女子走高跳	7位	盛田 紗希
北信越高校新人大会	男子100m決勝	5位	杉元 裕貴
	女子3000mW	8位	池田 愛深
晴れの国国体(岡山)	男子5000mW	優勝	鈴木 雄介

男子バレーボール			
加賀地区高校選手権大会		優勝	

女子バスケットボール			
県高校新人大会		ベスト8	

ハンドボール			
県高校新人大会	男子	3位	
	女子	ベスト8	

サッカー			
全国高校選手権大会	県予選	ベスト8	

水泳			
北信越高校大会	女子高飛込	2位	宮下 亜衣
	女子飛板飛込	4位	宮下 亜衣
	学校対抗女子飛込総合	3位	
きらめき総体(千葉)	女子高飛込(予選)	18位	宮下 亜衣
	女子飛板飛込(予選)	19位	宮下 亜衣
県高校新人大会	100m自由形	2位	大野 友嗣
	400m自由形	3位	大野 友嗣

男子テニス			
加賀地区高校新人大会	団体	2位	
	シングルス	1位	山本 泰生
		3位	道端 辰也
	ダブルス	1位	山本 泰生
			道端 辰也

山岳			
県高校新人大会	女子総合	優勝	

ボート			
県高校新人大会	男子Sスカル	1位	若本 一敏
	男子Wスカル	1位	加納 広崇
			河原 一樹
	クォドルプル	2位	葛西 恒平
			向 智史
			吉田 彬人
			前田 和孝
			多谷 和哉
	女子Sスカル	2位	小畑 志帆
	女子Wスカル	2位	東出 光世
			高田 南帆子
	女子クォドルプル	2位	吉田 桜
			吉田 春菜
			森 真澄
			森 光代
			山村 紋加

カヌー			
晴れの国国体(岡山)	少年男子C-1(500m)	準決勝9位	二木 達博
	少年男子C-1(200m)	準決勝9位	二木 達博
県高校新人大会	男子K-1	2位	奥田 修平
	男子K-1	3位	北本 直己
	男子K-2	1位	加藤 雅晃
			奥田 修平
		2位	北本 直己
			本保 浩太
	男子C-1	1位	二木 達博
		2位	飯田 涼太
	男子C-2	1位	二木 達博
			飯田 涼太
	総合	1位	

弓道			
加賀地区高校大会	男子団体	優勝	
県高校新人大会	男子団体	3位	
	個人	優勝	酒井 正利
		6位	池田 彰典

バドミントン			
県高校新人大会	個人女子シングルス	ベスト16	室田 麻衣

野球			
北信越高校野球大会	県大会	ベスト8	

放送			
県高校放送作品コンクール	第2部門(録音構成)	優秀賞	「アウター・ピンキー・ハウス」
県高校放送コンテスト新人大会	アナウンスの部	優秀賞	南出 尚江
		優良賞	赤田 理紗
	朗読の部	入選	角二 遼

吹奏楽			
県吹奏楽コンクール		金賞	(県代表)
北陸吹奏楽コンクール		金賞	

文芸			
全国高校文芸コンクール	短歌部門	入選	山下 真穂

ESS			
県高校英語劇発表会		Best Efforts賞	

かるた同好会			
県高校かるた選手権大会	1部(有段者の部)	優勝	本多 未佳

体操同好会			
県選手権大会	男子個人総合	6位	黒川 昌悟
北信越ジュニア選手権	男子個人総合	16位	黒川 昌悟
県高校新人大会	男子個人総合	3位	黒川 昌悟
		6位	竹内 真樹

空手同好会			
きらめき総体(千葉)	個人組手	二回戦進出	子坂 英史

少林寺拳法同好会			
少林寺拳法県大会	団体演武	最優秀賞	
	男子組演武	優良賞	片桐 智志
			馬場 正弘
	単独演武	最優秀賞	松尾 星弥
		優良賞	馬場 正弘
	女子単独演武	最優秀賞	高 沙織

トランポリン同好会			
県高校新人大会	Bクラス	3位	白川 綾香
		5位	小橋 唯子
		6位	横田 夏祈

学校だより

社会人講師による パネル ディスカッション

パネラーの皆さん（左より）
佐々木 雅也氏、中山裕未氏、
柏田修作氏、山口源治郎氏

一年生を対象にした社会人講師によるパネルディスカッションが、完成したばかりの生活学習センター棟の集会室（兼視聴覚室）の柿落としの行事として、十一月一日に開催されました。これは、二年時以降の文理選択をはじめとした進路学習の一環として毎年行われているもので、今回で五年目を迎えます。毎年、同窓生を中心に各界で活躍なされている先輩諸氏を招き、進路や学習面などに関して有意義なアドバイスをいただいています。

今年は東京学芸大学教授で図書館情報学に関する著作も数多くある山口源治郎氏（高校25回）、サッポロビール（株）食品事業部長で、あの大ヒット商品サッポロドラフトワン開発の立役者でもある柏田修作氏（高校26回）、若手女性を代表して、やわたメディカルセンターで薬剤師として活躍する中山裕未氏（高校45回）、そして新進気鋭のエコノミストとして活躍中の（株）野村総合研究所の佐々木雅也氏（高校46回）の四人をパネラーとして招きました。

個性あふれる四人の講師陣に話題を提供し、各人各様の意見をとりまとめるコーディネーター役は本校PTA指導委員長の太田泉氏（高校26回）が務めました。

四人の講師の方々は年齢・職業ともさまざまでしたが、仕事の内容や苦労、やりがいなどを語る口調には後輩たちへの熱いメッセージが込められていました。目を輝かせ、熱心にメモを取りながら話に聞き入る生徒も多数おり、積極的な質疑応答も飛び交わされました。一年生にとっては、今後の進路選択、学習をはじめとした学校生活をいかに充実させていくべきかの指針を学び取る上で、非常に有益な行事であったと思われます。大変中身の充実したパネルディスカッションでした。

質問をする山口崇博君（1年8組）

高校創立記念講演会

2005年9月27日、小松市公会堂において、JT（日本たばこ産業）生命誌研究館館長の中村桂子先生をお迎えして、小松高校創立記念講演会が行われました。

本校は県のスーパーハイスクール・サイエンス部門の指定を受けており、生徒の科学に対する関心を高める機会にもなるように開かれました。

先生は「21世紀は生命を基本にする社会にしよう」という題目で、生命とは何か。21世紀は生命の時代。DNA研究は驚くべき新たな知見をもたらしている。というように、生命科学の視点から新しい未来像をお話されました。

やさしく、わかりやすく、丁寧な言葉で、第一線の科学者からの示唆に富むものであり、生徒も生命の神秘を考えることができたと思います。ありがとうございました。

生命誌研究館館長
中村桂子先生

編集室だより

新年あけましておめでとうございます

本年も会員の声や同窓会活動、学校の現状などを紹介して参りたいと思います。いつでも、どんな事でも結構です。皆さまの思いを投稿してください。

原稿は小松同窓会事務局宛に送付していただくか、E-mailでお送りください。

E-mail: matsukou@tvk.ne.jp　ホームページ：http://tensyudai.client.jp/

現在「天守台」発行部数は5,000部（年2回発行）です。送付ご希望の方は、郵送料として1,000円を同窓会事務局までお送り下さい。五年間（十回分）お送りさせていただきます。

「天守台」編集委員会

委員長　宮西　勉夫（高校9回）
委員　黒本　儀治（中学46回）
浜野　光代（県女35回）
野田　洋子（高校12回）
杉永　信幸（高校18回）
池田　幸夫（高校32回）
山口　和博（高校34回）
同窓会事務局
村井　恭子（高校34回）
学校職員　酒井　隆志（高校32回）
岡野　清